

# 製茶農家にみる家業継承構造

——狭山茶産地の事例から——

The structure of the succession of the family business seen in the tea farmer: a case study of Sayama tea production area

木村ひなの

キーワード：茶業, 製茶農家, 家業継承構造, 消費者, 自園自製自販

The purpose of this paper is to clarify the family business succession structure from the case of tea farmers.

Family business refers to a business that has been inherited for multiple generations. In the past, family management has been the basis of agriculture, and agriculture has been inherited as a family business. Stable farmland management has been achieved by repeating inheritance based on direct families. However, in recent years, due to the lack of successors and the aging of farmers, there are cases where it is difficult to inherit by direct family members. In order to cope with this, the entry of new farmers such as companies and new farmers is attracting attention.

Iruma city, Saitama prefecture, is known as the center of Sayama tea production area. It is a small scale as a production area of tea, and it is characterized by management carried out by each farmer all the way to cultivation, processing, and sales. As a background, there are geographical conditions that production is low because of the cold climate and that it is adjacent to Tokyo, which is the main consumer area. In addition, mecha-

nization and enhanced retail functions have had a significant impact on the booming economy during the period of high economic growth. The tea industry was operated on a family-by-family basis and has been inherited as a family business. However, due to the recent recession, the shortage of successors has become a problem even in tea farmers. Tea farmers are thinking about addressing this problem in order to connect the family business to the next generation.

Therefore, in this paper, based on the interview with the tea farmer, we consider the structure in which the family business has been inherited to this day based on the characteristics of the tea industry. With that in mind, we will also pay attention to what kind of strategies farmers will develop with the aim of inheriting the family business in the future.

## 目次

### はじめに

#### I 先行研究の検討と調査地概要

##### 1 先行研究の整理

##### 2 問題の所在

#### II 狭山茶産地における茶業の展開

##### 1 調査地概要

##### 2 狭山茶の概要と生産構造

##### 3 狭山茶生産の歴史的展開

##### (1) 茶業の復興から戦後まで

##### (2) 高度経済成長期の茶業

##### (3) 茶需要の低迷と現在

#### III 農家の経営とその変容

##### 1 製茶農家の概要

##### 2 経営実態とその変遷

- (1) 生業の変遷
- (2) 機械化と労働力
- (3) 販路の選択

#### IV 家業継承構造の分析

- 1 話者概要
- 2 親と子の立場からみる家業継承事由
  - (1) 子の選択
  - (2) 親の思い
- 3 製茶農家の特性
  - (1) 家業の継承構造
  - (2) 消費者の存在
- 4 製茶農家にみる家業継承構造

おわりに

## はじめに

高度経済成長期以降の日本農業は、主に産業構造や家族構造の変化を要因として、後継者不足や農業従事者の高齢化という、農業生産の維持と継承に関わる問題に直面してきた。また、近年新たな傾向として農業の担い手の多様化があり、企業や組合、新規就農者らによる営農が注目されている。

しかしながら、従来日本農業は家族単位で営まれる家族経営を基本としており、農業は家業として継承されてきた。今回事例として取り上げる狭山茶産地の製茶農家も、家業として代々継承され、営まれてきた。そこで、本稿では、狭山茶の主産地である埼玉県入間市の製茶農家を対象に、当該地域における茶業の展開と現状、そして茶業が家業として継承されてきた背景をその特性を踏まえて検討し、製茶農家における家業継承構造を明らかにすることを旨とする。本稿では、茶業の特徴が家業継承構造にどのように関係しているのかを、狭山茶の主産地である埼玉県入間市の製茶農家を対象として検討していく。

一口に茶農家といっても、どの工程まで携わるかでその様相は異なる。本文では、広く加工から販売まで行う農家を製茶農家、煎茶への仕上げ加工の前段階である荒茶までの製造を行う農家を荒茶農家、生葉を収穫し製茶農家に卸す農家を生葉農家と表記する。また茶に関連する産業をまとめて茶業と表記する。

## I 先行研究の検討と調査地概要

### 1 先行研究の整理

家業とはその家で複数世代に亘って継承されてきた生業を指す。川手督也によれば、伝統的な家業経営では家長が強い権限を持つ家父長的な家族関係があり、家長と呼ばれる中高年の男性が家業経営・生活を一元的に統制していた。そこでは家族構造は直系家族制であり、長男が後継者として家業・家産・家名を家長から継承するのがルールになっていたという [川手 2015: 9]。

農業経営に目を向ければ、岩元泉によると、家業としての農業と家産としての農地が一致した、すなわち経営の単位と所有の単位が一致しているのが自作農であり、日本では戦後の農地改革以降、直系家族からなる農家が循環的利用を必要とする農地の管理者として適当であるとみなされてきたという。農業生産は1年をサイクルとして、世代交代は25年から30年を1サイクルとして行われ、このような農業生産と家族が連綿と循環することが農業を家族単位で営むことを適当とする理由である。そしてこのサイクルが完結しなくなったことで家族農業経営の継承問題が始まったという<sup>1)</sup> [岩元 2003: 212-213]。また、熊谷苑子は直系家族において一人の子どもが農業経営を相続し、継承がスムーズに行われることで家族成員の生活保障が安定し、地域社会の固定した土地利用秩序に対応出来ることを指摘している [熊谷 2006: 69-70]。

近年では、戦後の民法改正による「家」制度の崩壊以降、家族の個人化や高齢化、少子化による農家世帯員の縮小化といった事象が家族農業経営に変化をもたらし、農家世帯員内からの後継者確保の困難から法人化の増加や第三者継承という新たな動きが起こっているという [仁平 2011: 57]。加えて

農業機械化が家族農業経営と継承構造に与えた影響も大きい。機械化によって発生した余剰労働力となった若年層が農外就労にふりむけられた結果、農家内部における生活空間・生活時間の分化をもたらし、家族農業経営の構成員間の社会関係の個別化が始まったと述べ、結果、子どもの離村を招き直系家族による継承が困難になっているという [熊谷 2006 : 75]。

## 2 問題の所在

家族農業経営や家業の継承問題に関する研究は、柳村や内山、岩泉らをはじめ、多く行われてきた。そこから家業経営の特性や構造が明らかにされてきたが、後継者の継承選択の事由を生業ごとに分析した研究において、嗜好品である茶を扱った研究は少ない。

また、町田歩未は静岡県磐田市の茶農家を対象に、家業が継承される構造とその要因を研究した。製茶農家が後継者の確保を可能としているのは、親による継承に向けた戦略的志向が大きく影響していることを分析している。それだけではなく、家業を継承することで衣・食・住の心配がないこと、家族内で最低限の福利厚生が実現すること、加えて自分の生き方や仕事のやり方を自分自身で選択出来ることが家業のやりがいとなるといった、家族労働としての家業の特性が後継者の選択に関係していることを指摘している [町田 2017 : 144-145]。

しかし、町田の研究には世代ごとの経験した社会変化を捉えた分析が不足している。嗜好品である茶は食生活や生活様式、社会状況の変化に強く影響される作物であり、この視点を踏まえた分析が、継承構造の詳細を捉えるうえで必要である。加えて加工品である茶の製造は栽培・火入れ・再製加工・販売といった複数の工程が存在しており、産地によって作業が共同化されていたり、全て自家で行ってしまうのが一般的であったりと、多様な経営形態が見られる。そのため、こうした産地ごとの違いや茶の特性に注目した考察が必要であると考えられる。

以上の点を考慮しながら、本稿では狭山茶の主産地である入間市の製茶農家を対象として、多くの問題を抱える日本農業の中で、なぜ製茶農家は代々

継承されているのかを考察する。

## Ⅱ 狭山茶産地における茶業の展開

### 1 調査地概要

入間市は埼玉県西南部に位置し、埼玉県側では狭山市・所沢市・飯能市と、東京都側では青梅市・西多摩郡瑞穂町と隣接する都市である。自然環境としては加治丘陵と狭山丘陵に挟まれるように武蔵野台地が広がっており、部分的に起伏はあるものの、地勢は概ね平坦である。また、入間川・霞川・不老川の3本の河川がそれぞれ東西に流れており、自然環境に恵まれた土地である [入間市史編さん室編 1981: 4]。

産業としては農業を中心に展開してきた土地である。入間川・霞川に沿う低地では一部水田がみられたものの、関東ローム層に覆われた武蔵野台地は水はけが良く、稲作には適さないため、昔から主に麦や甘藷などの畑作が中心の農村地帯であり、現在でも露地物野菜の栽培が行われている。また、台地上の上乾下湿な性質は茶樹や桑の栽培に適しているため茶業や養蚕業・織物業で栄え、加えて現在では養蚕と同様に衰退しているものの、酒造・味噌・醤油などの醸造業、養豚も行われてきた。現在では狭山茶生産が市の地場産業となっており、狭山茶産地内で最も栽培面積と経営体数が多い地域となっている (表1参照)。農業地区である金子地区を中心に茶が生産されている。

昭和30年代からは経済成長によって第二次産業や第三次産業である工業・商業が進展し、昭和41(1966)年には入間市狭山ヶ原に武蔵工業団地が建設

表1 狭山茶の作付面積と経営体数 (平成27年)

	作付面積 (a)	経営体数
入間市	29,489	295
所沢市	14,335	146
狭山市	8,109	78
飯能市	2,522	47
日高市	2,202	27

資料：農林業センサス都道府県別統計書より作成

され、その後も東京都のベッドタウン化による人口増加や都市化・住宅地化が行われ、農地の減少が進んでいる [入間市史編さん室編 1981：17]。

また近世から八王子と日光を結ぶ日光裏街道や川越道・青梅道などの宿場・伝馬継立の地として栄えており、交通の要所でもあった。現在では西武池袋線とJR八高線の二つの鉄道が通り、国道16号や圏央道を含む九つの道路が走るなど機能的な交通網が形成されている [入間市史編さん室編 1981：21]。

## 2 狭山茶の概要と生産構造

狭山茶は、埼玉県および隣接する東京都西部地域で栽培された荒茶を100%使用し、仕上げ製造を施した茶の事である。茶の産地としては経済的に成立する北限地帯であり、関東以北最大規模の生産量を誇る。茶の木は寒さに弱く、静岡県や鹿児島県などの他産地では4月から一番茶の摘採が始まるが、狭山茶産地では5月の初旬から中旬に一番茶のピークを迎える。また年3回から5回摘採出来る他の茶産地よりも、年2回（二番茶は6月末から7月）と収穫出来る回数が少ないため、全国的に見ても収穫量は12位となっており、茶産地としては小規模に収まっている [入間市博物館編 2014：20-21]。

静岡県内をはじめとする大規模産地では、茶の生産・加工・流通は分業化され、斡旋商・仲買・問屋といった複数の業者を経て商品が消費者に届くのが一般的であるが、狭山茶産地では自分の農地で栽培し、収穫、製茶したものを自ら販売するという自園自製自販型の経営形態が主流となっており、1軒の農家の中で生産から流通が完結していることが特徴的である。そのため、この地域の茶農家を訪れると家の周辺には茶の販売を示す幟が立ち、敷地内では家と隣接する形で店舗と工場が設けられている様子を見ることが出来る。

## 3 狭山茶生産の歴史的展開

### (1) 茶業の復興から戦後まで

本節では、埼玉県狭山茶業会がまとめた『狭山茶業史』の記述を中心に、

入間市における茶業の歴史的展開を確認する。

現在、入間市を中心に生産されている狭山茶の起源は最も古いもので南北朝時代まで遡るが<sup>2)</sup>、関東随一の茶所として展開し始めたのは江戸時代後期になってからである。日本における茶の歴史は長く、その楽しまれ方もさまざまであるが、江戸時代になると嗜好品としての茶は庶民の生活の中に普及し、需要も大きな高まりを見せていく。元文3(1534)年に京都宇治の永谷宗円が宇治製煎茶法という手揉み製茶技術を発明すると、江戸を中心にその技法で作られた煎茶が流行し、その技術も全国各地の製茶地域に流布することとなった。狭山地方ではもともと茶樹が畦畔や山間などに植わっており、狭山茶の前身である河越茶の復興と江戸での茶需要の高まりを受け、吉川温恭・村野盛政・指田半右衛門らを中心に茶生産が本格的に開始された。製茶技術の習得と量産化を進め、文政2(1819)年には江戸の茶問屋との取引が可能となるだけの品質と生産量を持つほどとなっている。この頃、畦畔茶園と数枚の焙炉を必要とする製茶が可能だったのは地主階層や村役人といった身分や財力がある家であり、この傾向は明治以降もしばらく続いている。安政5(1858)年の開国以降、生糸や茶が重要な輸出品となると江戸幕府により茶の作付けが勧奨され、農民にとっても関東ローム層特有の土の飛散を防ぐうえに換金性もあるということでこの動きは歓迎され、畦畔茶園が増加するようになる [埼玉県茶業協会編 1973 : 49-68]。

安政6(1859)年6月には横浜・長崎・函館の3港が開港し、アメリカを始めとする諸外国との貿易が始まった。日本からの主な輸出品である茶や生糸などは主に横浜港で取引されていたため、狭山地方では八王子商人を挟んで積極的に茶を輸出している [埼玉県茶業協編 1973 : 74-75]。明治8(1875)年には繁田武平を中心に現入間市・川越市・狭山市・志木市などの茶商・茶業家により、茶の品質向上と直輸出を目指した狭山会社が設立され、これをもって「狭山茶」という銘柄が与えられた [埼玉県茶業協会編 1973 : 101]。明治20(1887)年頃からは、最大の輸出先であったアメリカで嗜好されるものが緑茶からコーヒー・紅茶に移ったことや絹の需要が増大したことにより、狭山地方でも茶園を廃して桑園化する傾向が進んでいった。茶園の適地は桑



園の適地でもあるため、農家は稼ぎを求めて積極的に転換し、当該地域での養蚕業が盛んになっていった。明治に入ってからには生産量増加や生産コストの抑制、品質の向上を目指して狭山地方で高林謙三を中心に製茶機械発明の試みが進み、大正に入ってからには機械製茶が普及していった [埼玉県茶業協会編 1973 : 151-167]。

大正末期から昭和初年にかけて共同製茶工場が狭山地方で26か所設置され、昭和3(1928)年には機械製茶技術の向上や講習を行う埼玉県立茶業研究所が設立されている。昭和3(1928)年から昭和7(1932)年にかけては農業恐慌の影響を受けて茶園の減反が進んだものの、昭和9(1934)年頃からの不況の回復後は、狭山茶産地は最大の消費地東京・横浜に近いことや品質が評価され、海外から国内需要へ販路を転換し、京浜地帯・東北・北海道・上信地方など北への販路を獲得した。またこの頃から共同加工から個人経営に戻る傾向が進んでいる [埼玉県茶業協会編 1973 : 184-187]。

戦時中の狭山茶生産は、徴兵・軍事産業への動員による人手不足や食糧増産の要請から荒廃していったが、戦後は輸出農産物として復興し、加えて昭和21(1946)年に埼玉県が掲げた茶業復興5ヶ年計画により、4年間で茶園面積は戦前とほぼ同様になるまで復活している。また東京に隣接していることから、茶や当時最も不足していた農産物の生産と、中間業者を通さない直接販売による多くの利益が農家に入ったことが、その後の茶業発展の経済的基礎となったことが指摘されている [埼玉県茶業協会編 1973 : 194-195]。

## (2) 高度経済成長期の茶業

狭山茶の発展については前節で見てきたように、その起源から戦後にかけての研究は多くなされており、記録も豊富である。また、手揉み製茶技術などの伝統的な技術にも注目されることが多い。しかしながら、日本社会における大きな転換点と言える高度経済成長期とそれ以降にかけての研究は少ない。本節では、渡部圭一の研究を中心に、狭山茶産地が経験した高度経済成長期における農家の動向をまとめる。

日本における高度経済成長期は一般的に昭和30(1955)年から昭和48(1973)

年の19年間程とされ、人々の生活様式は大きく変化した時代である。産業構造も変化し、サラリーマンの増加や第一次産業から第二次産業や第三次産業への人の流れが見られるようになった。

渡部は狭山茶の生産農家を対象に、平成19(2007)年に所沢市で、平成20(2008)年に入間市金子地区で高度経済の動向に注目した調査を重ねており、ここでは当時の農家の動向を示す資料として扱っていく。

高度経済成長期の真ただ中である昭和40年代頃、これまで畦畔茶が一般的だった当該地域において、専門的な茶園の面積は急速に拡大する。昭和21(1946)年からの茶業復興5ヶ年計画の地続きの成果も含まれているが、背景には当時サラリーマン化の影響を受けて畑に空きがあったこと、茶園管理に労力がかからないこと、そして作れば作るほど売れるという好景気の影響があったことが挙げられる。この頃に農家は現金収入源としての茶の可能性に着目し、その経営は大きく変化していく[渡部2008:137]。

茶の需要が生産量の追い付かないほど増加した頃、茶作りによって得た現金収入で摘採や製茶工程における機械化が進んだ。ちなみに、前節では大正以降に機械が普及し始めたことと記述したものの、その当時非常に高額な機械の導入が出来たのは一部の財力のある家やすでに専門的に茶業を営んでいた家であり、茶が数ある生業の一つでしかなかった家では機械導入に至るまでにはなっていないことを指摘しておく。機械化以前、摘採では手鋏みを使用し、製茶工程では職人による手揉みによって茶作りが行われており、小規模な生産が行われていた。しかし畦畔茶生産から茶園生産への転換が進み、機械の導入によって生産量が増加したことで、生葉の獲得が何よりの急務となり、製茶農家は軒もの生葉農家との契約を結んでいった。その過程で畦畔茶を持つ家から生葉を買い集め、工場に納める仲買という職業も一過性ではあるものの生まれている。また、当該地域の多くの農家では養豚・養鶏・酪農・養蚕などとの複合的生業形態が一般的であったものの、それらを整理し、徐々に茶の一本化を進めていっている。それに伴い豚舎や鶏舎などの他の生業に使用していた作業場は茶工場として改築され、屋敷内も茶業に特化していく[渡部2007]。

また小売りの機能も茶業への専門化と共に強化されていく。狭山茶は、産地としての形成が進む頃から量産ではなく、他地域よりも少生産であっても味や品質にこだわった高級品であることを重視してきた。しかしながら、流通過程で茶商などの中間業者を挟むことは価格を相手に決定され、また収益も業者を挟むごとに少なくなるということである。反対に、自分で行うということは価格を自分で決定し、売れた分を全て収益に出来るということである。茶需要の増加という高度経済成長期頃の好況により、今日の多くの製茶農家は自園自製自販という経営を選択している。このような動きに踏み出せたのも、東京都という緑茶の大消費地が近いという立地的好条件が関係している [渡部 2008]。

以上から、高度経済成長期の好気は今日の茶所の姿を作り上げてきたことが見えてくる。同様に筆者の調査の中でも、特に高度経済成長期前後に就農している親世代の語りの中にはこの頃の好況について、「とにかく量を作ることに注力していた」(C.A)「良い時代だった」(A.A)と振り返る声は多い。

### (3) 茶需要の低迷と現在

高度経済成長期というのは多くの茶業家にとって良い時代だったことが上述のような農家の語りから窺うことが出来る。しかしながら、食生活の洋風化や飲料の種類増加、核家族や共働き家庭の増加といったさまざまな要因により、昭和50年代半ば頃から茶需要は徐々に低下し、製茶農家や生葉農家の経営は厳しいものとなっている。特にペットボトル飲料の普及や贈答品としての需要低下によって、緑茶の中でも急須で淹れるリーフ茶の消費は減少傾向になっている。本節では、このような茶業界の不況開始から狭山茶産地の現況についてまとめる。

狭山茶産地は国内の主要な茶所ではあるが、一面に茶畑が広がる景観というものは金子地区に見られる程度で、基本的には小規模な茶畑が点在している形である。このような景観となっている背景には、前節で確認した渡部の研究にあるように、昭和以降の茶産地としての成立過程で各農家がかつと所有していた複合的な生業の場茶畑に転換したこと、自園自製自販という経

営形態をとることから個々の家で処理可能な経営面積にとどめる必要があったこと、加えて西武線沿線を中心として行われている宅地化の進行が挙げられる。また茶業界の不況や収入が少ないことによる生業農家の廃業による耕作放棄地の増加も当該地域の課題である。耕作放棄地に関連して、伊藤園や首都圏アグリファームといった企業の参入も近年の動向として確認しておきたい。話者 E.B、G.B によれば、企業はペットボトル飲料の原料として茶畑の確保を進めており、耕作放棄地や廃業によって茶畑を手放すことになった農家の中には茶畑をこれらの企業に提供する家も増えているという<sup>3)</sup>。

平成に入ると平成7(1995)年12月に発生した所沢ダイオキシン問題や、平成23(2011)年3月に発生した東京電力福島第一原発事故による放射能物質汚染の風評被害の問題も発生し<sup>4)</sup>、狭山茶の買い控えという事態にさらされる出来事も起きている。

### Ⅲ 農家の経営とその変容

#### 1 製茶農家の概要

本節では、表2を用いて、調査対象である9軒の製茶農家の概要を確認していく。

茶業に着手し始めた時期は家によりさまざまであるが、全ての家が複数世代に亘って茶業が家業として継承されている。古い家ではB家、E家、G家のように江戸時代から、最も新しい家でもA家、D家、F家のように昭和初期頃から創業しており、前章で確認したように江戸時代の茶業復興期から明治時代の輸出好景気、大正末期から昭和初期の国内需要隆盛期という、狭山茶業が盛り上がりを見せていた時期から茶業に携わっている。またH家は正確な創業年は不明であるが、明治時代には手揉み製茶を行っていた記録があり、製茶農家としての歴史は長いことが分かる。

狭山茶産地の特徴に自園自製自販という経営形態が挙げられるように、全ての農家が茶畑・工場を自家で所有しており、F家のように店舗を所有していない家もあるものの、全部の家が消費者との直接のやり取りを行っている。

A 家以外は生葉農家と契約し、買い葉を行っている。機械化によって増加した処理量に対応出来るだけの生葉を獲得するため、戦後、競うように生葉農家との契約が行われてきたという歴史がある [渡部 2007: 95]。しかしながら、D.B によれば現在、生葉農家は製茶農家よりも茶業で儲けを出すことが難しい上に栽培肥料や摘採機械の維持費用などが掛かるため、年々廃業傾向にあり、契約件数は減ってきているという。

## 2 経営実態とその変遷

### (1) 生業の変遷

ほぼ全ての家が最初から茶専業農家であったわけではない。都市近郊農村であった入間市域では、農家は養蚕・養豚・養鶏<sup>5)</sup>・機織り・畑作などとの複合的生業によって生活を営んできた。過去の生業に目を向ければ、A 家、C 家、D 家、E 家は複数の生業と組み合わせており、茶業は数ある現金収入源の一つとして行っていたことが分かる。茶業の特性として、繁忙期が大方5月から7月までと限定的であることがそれらを可能にしている。

また、これらの生業を整理して茶専業農家になっていくのは昭和40年代であり、渡部の研究にあるように、農家は高度経済成長期の茶業の好況に対応していったのである [渡部 2008]。

現在でも C 家、F 家、H 家、I 家は茶以外の生業を行っている。F 家、H 家はもともと農閑期の現金収入として、I 家の倉庫貸しもやはり現金収入として以前から行っていた。C 家に関しては、平成30(2018)年からと、最近になってからサトイモ栽培を行っている。これは、茶の売り上げが低下しつつある中での、新たな現金収入源開拓を目的としたものである。

ただし、畑作では、茶での収入の不足を補うために仕方なく選択されたものではなく、農作業の面白さから複合的な生業形態を採用している側面もある。

このように、もともと茶を含めた複合的生業を行っていた農家が高度経済成長期の茶需要の増大から茶専業農家へ移行したが、近年の茶需要低下によっ

表2 調査対象農家一覧（埼玉県入間市）

	農家の概要			現在（調査時点）の経営状況					
	地区	創業	世代 (茶業家として)	経営面積 (ha)	買葉	荒茶処理量 (kg)	荒茶工場	再生工場	出荷
A家	豊岡	昭和初期	4代目	1.5	×	1,500	○	○	×
B家	藤沢	江戸時代中期	17代目	3	○	7,000	○	○	卸し
C家	金子	明治 ※昭和45 (1970) 年頃から 専業	4代目	3	○	4,000	○	×	間屋
D家	金子	昭和初期	4代目	5 昭和50 (1975)年 頃改植・品 種化	○	7000	○ 平成10 (1998)年 頃建替え 機械更新	○ 昭和10年 頃建替え 機械更新	×
E家	金子	江戸時代中期	14代目	2.75	○	2,400	○ 平成4 (1992)年	○ 平成4 (1992)年	卸し
F家	金子	昭和初期	3代目	3	○	2,000	○	×	間屋 ※間屋には父 の同級生が 卸している
G家	金子	江戸時代後期	6代目	3	○	3,000	○	○	卸し
H家	金子	不明	不明	3	-	5,000	○	○	卸し
I家	藤沢	大正15年	不明	5	○	3,000	○	○	荒茶の半分は 間屋

資料：聞き取りより筆者作成

現在（調査時点）の経営状況						過去の経営状況		
自宅店舗	HP	通販	雇用 (家族以外)	茶以外の 収入源	役割分担	出荷	生業	雇用 (家族以外)
○ 小売りは昭和 40年代から	○	○	○ 繁忙期の 茶摘み		畑：息子 工場：息子 販売：父・息子・ 母		昭和40年代ま で養豚・養鶏	
○	○	○	○ 繁忙期の 茶摘み		畑：父、婿 工場：父、婿 販売：父、母、娘			秩父や秋田から 出稼ぎの人
○	×	×	×	農閑期にサト イモ栽培	畑：父 工場：父 販売：父、母		昭和40年代 まで養豚・養 鶏・養蚕、ム ギ・サツマイ モ栽培	
○ 小売りは昭和 50年代から	○	×	○ 繁忙期の 茶摘み		畑：父、息子 工場：父、息子 販売：父、息子、 母	問屋へ	昭和40 (1965)年頃ま で養豚・養鶏、 ゴボウ栽培	泊まり込みで 茶摘みの人
○ 工場脇の作業 場 →ブレハブ →平成16 (2004)年 店舗	○	×	○ 繁忙期の 茶摘み		畑：父、息子 工場：息子 販売：父、息子、 母、嫁	2/3を 問屋へ	養豚・畜産、 ムギ・サツマ イモ栽培	・東秩父～から 泊まり込み で職人が 出入り ・平成9 (1997)年 頃まで秩父 から一人来 ていた
△ 近隣住民や親 戚の希望があれば販売	×	×	×	農閑期にシイ タケ栽培	畑：息子 工場：父、息子、 父の弟			
○ ・小売りは 昭和40 (1965)年 頃から ・店舗は昭和 50(1975) 年頃から	○	○	○ ・常時3人 程度 ・繁忙期の 茶摘み		畑：父、息子 工場：父、息子 販売：父、息子、 母			秋冬には東北 から季節労務
○	×	×	○ 繁忙期の茶 摘み	農閑期にサト イモ・カブ等 の野菜栽培	畑：息子 工場：息子 販売：母、息子、 嫁			近所の人
○	×	×	○ 繁忙期	・クリ・カボ チャ・ユズ 等の野菜・ 果樹の栽培 ・倉庫貸し	畑：父、息子 工場：父、息子 販売：父、母	大半を 問屋へ		

て、再び複合的生業を選択する農家が出現しつつあることが分かる。

## (2) 機械化と労働力

現在、機械化はどの家でも進んでおり、労働力は家庭内だけで十分獲得可能となっている。本節では新井祥穂の報告と合わせながら、近年の機械化と労働力の変化をまとめていく。

茶業の中で機械化される工程は主に摘採と加工である。新井によれば、戦後の変化は製茶過程から始まり、その後も摘採過程と交互に拡大してきたという。新井の研究のように、製茶過程の機械化による処理量増加に対応するように摘採過程も整備されているのである。製茶過程では戦後までは伝統的な職人による手揉み製茶が行われてきたが、昭和30年代後半から30k型ライン<sup>6)</sup>の普及と工程間のコンベア連結が進み、その後も昭和40年代後半に60k型ライン導入、昭和50年代には各工程の自動制御化普及、平成10年代には90k型ラインと120k型ラインの導入という風に徐々に処理量や機能が向上した製茶機械が導入されている。摘採過程では、戦前の手摘みから戦後の手ばさみの普及、昭和40年代には二人で使用する可搬式摘採機、平成に入ってからレール式乗用摘採機や乗用型摘採機が導入されており、農作業の省力化が進んでいる〔新井 2016：217-218〕。

機械化は作業効率を一気に向上させ、それに伴い労働力にも変化をもたらした。製茶過程では、従来大勢の職人を雇って、手揉み製茶という伝統的な技術を要する作業が行われてきた。摘採過程でも、当然手摘みや手ばさみでの摘採を行っていたころは大量の人出を要していた。これらの職人や「お茶摘みさん」は近隣では秩父地域から、遠いところでは東北地方から泊まり込みで来ており、「活気があって賑やかだった」(E.A, H.A)と当時の様子が語られる。また、E.Aが小学生であった昭和30年頃には一番茶の季節になると「茶休み」があり、学校を休んで茶摘みを手伝っていたという<sup>7)</sup>。

しかしながら、機械の導入が進むようになると製茶過程では大勢の職人は不要となり、徐々に家族内労働力だけで完結していくようになっていく。摘採過程に関して言えば、レール式乗用摘採機や乗用摘採機の導入により1人



でも生葉の収穫が可能となっている。

ただし、摘採過程では現在でも一番茶の時期には「お茶摘みさん」を雇っている。理由としては、高品質な茶を作るためには機械よりも手摘みの方が良いため、品評会への出品や手揉み茶の製造のために茶摘みさんを雇うのだという (G.A)。

### (3) 販路の選択

加工した茶をどのように販売していくのか。その方法や販路の選択も家によりさまざまである。小売りの機能に関して、F 家を除くと全ての家が店舗を所有し、販売を行っている。F 家も店舗はないものの、近隣住民や親戚に言われれば販売しているとあり、調査した農家全戸が消費者との直接のやり取りを行っている。

前章で狭山茶産地における高度経済成長期の変化を確認したが、A 家、D 家、G 家は「その方が儲かるから」(A.A、D.A) として、この時期に販路を小売りに変更しており、農家は問屋などの中間業者に頼らない販売方法を選択してきている。また I 家は D 家と同様、以前は自家で加工した荒茶のほとんどを問屋に卸していたが、息子が就農する平成 27 (2015) 年の少し前に小売りを開始している。当家は、比較的最近になってから店舗を用意しているが、これも稼ぎを目的とした選択である。

では、製茶農家と問屋の関係はどのようなものであるか。現在自家で加工した荒茶を問屋に卸しているのは C 家、F 家、I 家である。F.A が「問屋の要望に応えなくちゃならない」と語るように、問屋と契約している製茶農家は、味や香りに大きく影響する蒸し具合に対する問屋の厳しい要望に応えることが重要となるのである。

また B 家、E 家、G 家、H 家など企業や飲食店などへの卸しを行っている家もある。自家以外でも販売してもらうことで販路を拡大しているのである。

## IV 家業継承構造の分析

### 1 話者概要

最初に、本節では主に表3を用いて話者の概要をまとめていく。

親世代の年代は昭和23(1948)年～昭和36(1961)年生まれ(令和2年時点で70代前半～50代後半)であり、子世代が昭和48(1973)年～平成元(1989)年生まれ(令和2年(2020)時点で40代後半～30代前半)であり、親世代子世代共に茶業が現在のような不況になるより前の、好況だった時代に生まれている人たちである。

経歴はさまざまであるが、狭山茶産地における製茶農家は、I家のように就農を選択したものの、一時的に農業以外の世界を経験させることを重視した父親の方針により、3年間の企業勤めをしている例もある(IB)が、基本的には高校または大学を卒業してすぐに就農するようである。

技術や知識習得は家で父から教わるか、静岡県国立茶業試験場や埼玉県茶業試験場などの専門機関で学んでから家で父に教わるかに分かれている。狭山茶産地では、製茶農家は各工程を共同化することなく各家で完結させる形態を採用してきた。加えて身近な存在である父親から直接教わるのが最も簡潔であるという考えから、A.A、D家、E家、G家、H家、I家のように茶の専門機関に通わずにそのまま就農することを選択した人も多い。

また、茶の専門機関への進学は親世代では少なかったものの、子世代になると一般的になっている。特に子世代で専門機関に進学した人は自ら進学したわけではなく、親に言われて進学したという人がほとんどである。親世代で唯一静岡県国立茶業試験場に進学したB.Aは、全国各地の茶業家が集まって2年間勉強した経験を「良い経験だった」と語る。茶業の基本知識を座学と実技ともに学び、各地の茶業家との交流も出来る静岡県国立茶業試験場への進学のメリットは少しずつ浸透し、子世代の頃には一般的な選択肢となっていたのであろう。また、埼玉県茶業試験場でも就農者に半年間の研修を行っており、茶業とは無縁だったB.Bもそこに通うことで基礎知識を習得し

表3 話者データ

	話者（親世代）					話者（子世代）				
	表記	生年月日	就農時期	経歴	技術・知識習得	表記	生年月日	就農時期	経歴	技術・知識習得
A家	A.A	昭和34 (1959) 年生	昭和57 (1982) 年頃	農業大学卒業	家で父から	A.B	平成元 (1989) 年生	平成26 (2014) 年頃	4 年制大学卒業	静岡県立茶業試験場(2年間) →家で父から
B家	B.A	昭和34 (1959) 年生	昭和55 (1980) 年頃	高校卒業	静岡県立茶業試験場(2年間) →家で父から	BB(婚) BC(娘)	昭和59 (1984) 年生 昭和62 (1987) 年生	B.B(婚) 平成25 (2013) 年頃	BB: 農業大学卒業 →6年間企業勤め BC: 農業大学卒業	埼玉県茶業試験場(半年間)で学びながら、家でも父から
C家	C.A	昭和33 (1958) 年生	昭和58 (1983) 年頃	4 年制大学卒業	埼玉県茶業試験場(半年間) →家で父から					
D家	D.A	昭和23 (1948) 年生	昭和41 (1966) 年	高校卒業	家で父から	D.B	昭和51 (1976) 年生	平成9 (1997) 年頃	高校卒業	静岡県立茶業試験場(2年間) →家で父から
E家	E.A	昭和29 (1954) 年生	昭和48 (1973) 年	高校卒業	家で父から	E.B	昭和54 (1979) 年生	平成12 (2000) 年頃	高校卒業	静岡県立茶業試験場(2年間) →家で父から
F家						F.B	昭和48 (1973) 年生	平成6 (1994) 年頃	高校卒業	埼玉県農業大学校(2年間) →埼玉県茶業研究所(半年間) →家で父から
G家	G.A(婚)	昭和29 (1954) 年生	昭和56 (1981) 年頃	高校卒業 →当時G家が東京に出店していた店で8年間勤める	義父や親戚、周囲の同業者から	G.B	昭和57 (1982) 年生	平成17 (2005) 年頃	4 年制大学卒業	家で父から
H家	H.A	昭和26 (1951) 年生	昭和45 (1970) 年頃	高校卒業	家で父から					
I家	I.A	昭和36 (1961) 年生	昭和59 (1984) 年頃	4 年制大学卒業	家で父から	I.B	平成元 (1989) 年生	平成27 年頃	4 年制大学卒業 →3年間企業勤め	家で父から

資料：聞き取りより筆者作成

ている。

## 2 親と子の立場からみる家業継承事由

### (1) 子の選択

現在、茶業に従事している人がなぜ就農することを選択したのか。表4にまとめたようにその理由は人によりさまざまであるが、最も多いのが、親世代子世代ともに長男であるということである。B.B、F.B、G.A、G.B以外の10名のほとんどが真っ先に理由として挙げている。しかしながら、細かく分析すると親世代と子世代ではそのニュアンスに違いがある。親世代では、「昔から父親に『家の煤から何まで全てお前のものだ』と言われていた」(C.A)「親に言われていたし、自然とレールを敷かれていた」(D.A)という語りに分かりやすいように、親からはっきりと長男である自分が家業を継ぐことを言われており、そのことに一種の諦めをもって家業を継ぐことを納得している。またA.A、B.A、E.A、H.A、I.Aらの「しかたがない」「それが当然だと思っていたから」といった語りも、長男であるから当然だという意識の強さの表れであると言える。

対して子世代では、E.B以外は親から直接家業を継ぐように言われたことはないと述べており、A.BやI.Bのように長男である自分が継がなければ家業が続かなくなってしまうという思いから就農を決意したことがうかがえる。加えてF.BやG.Bのように、就農選択理由の中心に長男以外の理由がある人がいることから、子世代では、長男という意識が家業継承に与える影響が親世代の頃よりも強力でなくなっていることが言えるだろう。

川手によれば、伝統的な農業の家業経営では家長が強い権限を持つ家父長的な家族関係があり、家長と呼ばれる中高年の男性が家業経営・生活を一元的に統制し、長男が後継者として家業・家産・家名を家長から継承するのがルールになっていたという [川手 2015: 9]。親世代ではこのような家父長的な規範が根強い時代であり、多くの人が「長男として」当然のように家業を継いでいったのであろう。そのことが他の職業への興味関心を持った人の少

なさにも如実に表れている。そして子世代では親世代の頃よりも家父長的規範は薄れていることから、「家業を継ぐことが一番堅実な道だと思った」(F.B)「自分のこだわりを出せる茶作りに面白みを感じた」(G.B)といったように、自分にとって最良の選択を考えて行ったという意識をもっている人や、他の職業への興味を抱いた人が多い傾向が見受けられる。ここで、家父長的規範の薄れが表れているのは子世代ではなく親世代からであることに注目しておきたい<sup>8)</sup>。

ただし、話者の中で唯一の女性である B.C のように、長女であることから祖父母や周囲から跡取りとなる婿を取ることをあからさまに期待されていたり、F.B、G.B 以外の人の理由の中に「長男だから」という意識があることから、家父長的規範の強さは家によってさまざまであることも指摘しておきたい。

A.A と I.A のように、当時の茶業界の好況が就農への選択を促している。親世代は昭和 23 (1948) 年から昭和 36 (1961) 年生まれであり、就農時期は昭和 41 (1966) 年から昭和 59 (1984) 年頃のこと、生まれた時から茶業界が好況な時代を経験してきた人々である。「作れば作るほど売れた」(I.A) と述べるように、量産を重視した時代なので、繁忙期は寝る暇もないほど忙しくなる。その大変さを良く理解しつつも、経済的に安定しているということが将来を選択するうえで大きく影響しているのである。

また、G.B は家業継承を選択した理由の一つに、こだわりをもって仕事が出来ると点を挙げている。ここでは、日常生活や手伝いの経験を通して、彼自身が就業前から家業を理解し、面白いと感じる部分を自然と見出していることが読み取れる。加えて、F.B は継ぐことが堅実な道であると考えて家業に従事している。家族が家業に従事する姿を見ながら、自然と製茶農家の生活サイクルを理解し、さらに衣・食・住の確保や家族と同じ仕事をしていくことの安定性を考慮した結果、「堅実」という言葉を使って家業の継承理由を表現したと考えられる。

子が家業を継ぐことを選択するうえで意識することは、主に家父長的規範に基づく長男の自覚と、経済的な安定が挙げられる。この点は世代問わず重

表 4 家業継承の事例

父					
	家業を継いだ理由	他の職業への興味・関心	家業への認識	手伝い経験	自分の後継に対して
A 家	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長男である自分が継がなければいけないと思ったから</li> <li>・なんとなく意識していたから</li> <li>・当時の茶業界が好景気だったから</li> </ul>			大学生の頃、小遣い欲しさに繁忙期に手伝いをしていた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家を継いでくれるとは思っておらず、特にアプローチしていなかった</li> <li>・継いでくれたことは嬉しい</li> </ul>
B 家	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長男であり、自分が継ぐのが当然だと考えていたから</li> </ul>		工場が遊び場	日常的に手伝いはしていた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・娘に対しては、大学進学の際農業に関係する大学に進学するよう言っていた</li> <li>・婿が後継者になってくれて嬉しい。良い関係を築いていけるように心がける必要がある</li> </ul>
C 家	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔から父親に長男である自分が家や家業を継ぐのだと言われていたから</li> <li>・こういう家に生まれたからしょうがない</li> </ul>	一時期企業勤めに憧れ		高校生の時に工場に入って手伝いをしていた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供たちは全員勤めに出ている</li> <li>・茶業界の現状を考えると、継いでほしいと伝えることは難しい</li> <li>・息子が継ぐ決意をしてくれた時の為に茶以外の現金収入源を用意</li> <li>・仕事のやりがいと自然と見つけてもらえるように手伝いをさせた</li> </ul>
D 家	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長男であるため、昔から家を継ぐことを言われていたから</li> </ul>			小学生の頃は畑の草むしりなどを親に言われてやっていた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・後継者が確保できたことで機械の更新に踏み切った</li> <li>・継いでくれて嬉しい</li> </ul>
E 家	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長男であるから</li> <li>・他の職業に興味が無かったから</li> </ul>			子供の頃に繁忙期は手伝いをしていた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・継いでくれて嬉しい</li> </ul>
F 家					
G 家	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お茶屋の子供に生まれて、自然とお茶の仕事をするようになっていたから</li> <li>・婚家に娘しかいなかったから</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>・経営状況が良好な時期に継がせることが出来て安心した</li> <li>・継いでくれて嬉しい</li> </ul>
H 家	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長男であり、継ぐのは仕方ないと考えていたから</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>・機械を導入して労働の負担を軽減できるようにした</li> <li>・継いでくれて嬉しい</li> </ul>
I 家	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長男であるから</li> <li>・親がやっていたから</li> <li>・当時茶業界の景気が良かったから</li> </ul>			小中学生の時に家の手伝いをしていた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・息子が継ぐことを決意した際はこれまでの道のりが報われたと感じた</li> <li>・外の世界を経験させるため、3年間の企業勤めを薦めた</li> </ul>

資料：聞き取りより筆者作成

子				
家業を継いだ理由	他の職業への 興味・関心	家業への認識	手伝い経験	自分の後継に対して
長男である自分が継がなければ後がないと考えたから	20歳位まで他の職業を志望		昔から繁忙期に摘採の手伝い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・茶業界の現況を踏まえると強制はしたくない</li> <li>・継いでもらいたければより良い経営状態にしなければならない</li> <li>・やる気のある人であれば、家族以外の人が継ぐのも一つの手手段だと思う</li> </ul>
<u>B.B (婿)</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>・婿家には娘しかいなかったから</li> <li>・長い歴史を持つ家であるから</li> </ul> <u>B.C (娘)</u> 跡取りとしての婿を取ることを同居の祖父母や周囲からプレッシャーを掛けられていた				<ul style="list-style-type: none"> <li>・茶業界の現況を踏まえると強制はしたくない</li> <li>・継いでもらいたければより良い経営状態にしなければならない</li> </ul>
長男であるから		<ul style="list-style-type: none"> <li>・お茶の仕事は身近な存在</li> <li>・工場が遊び場</li> <li>・人の出入りが多い</li> </ul>	子供の頃に工場に入って手伝い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・継いでくれたら嬉しい</li> <li>・この先茶業界がどうなっているか分からないため強制は出来ない</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・長男であるから</li> <li>・高校卒業間際に父親に継いでほしいと言われたから</li> </ul>	高校生までは他の職業に憧れがあった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お茶の仕事は身近な存在</li> <li>・繁忙期は親はボリボリ</li> <li>・GWには遊べない</li> <li>・騒がしい家</li> </ul>	繁忙期のみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在娘しかいないため、婿に継いでもらうか姉の子供に継いでもらえたらと思う</li> </ul>
家業を継ぐことが堅実だと考えたから	高校生までは他の職業に憧れがあった		昔から繁忙期には祖父・父・母に混じって工場を手伝い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・継いでくれて嬉しいが、収入が不安定なので強制は出来ない</li> <li>・継いでもらえなければ家業をたむしかないが、本人の意思を尊重したい</li> </ul>
自分のこだわりを出せるお茶作りに面白みを感じたから			昔から繁忙期に家の仕事の手伝い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の意思を尊重したい</li> <li>・自然と家業の面白みを感じられるような仕組みにしていこうための工夫が必要</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・長男であり、昔から家業を継ぐことになるだろうと考えていたから</li> <li>・父親が畑を守り続けている姿を見て</li> </ul>	一時期は他の職業に憧れがあった		昔から家の手伝いをしていた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・強制はしたくない</li> </ul>

視される。加えて、次項で述べるが、家族全員で家業に従事する中で自然と製茶農家の生活サイクルを理解し、さらに仕事の面白みや苦勞も知っていくことで後継者になるかどうかを選択しているのである。

## (2) 親の思い

親も家業を次世代に繋いでいくためにさまざまな努力をしている。5月初旬から7月初旬までの猛烈な繁忙期には、子どもも大切な労働力となるほど忙しくなるという事情もあり、親世代子世代ともに多くの話者が幼少期から畑や工場での親の仕事の手伝いを経験している (B.A、C.A、D.A、I.A、D.B、I.B)。中でも、C.Aは「仕事のやりがいや面白みを自然と感じてもらえたら」という意図のもと、子どもに手伝いをさせていたという。頭ごなしの強制はしたくないため、子どもが自ら納得して家業を継ぐことを選択出来るようにしたいという親の思いと言えるだろう。子どもの立場から見れば、生活の空間に仕事場があることや手伝いをすることで、仕事の面白みや「ゴールデンウイークには遊べない」(E.B) というような家業の年間スケジュールも理解することが出来る。また G.A は人間市内の製茶農家の次男であり、長男ではないため実家を継ぐことはなかったが、茶屋の息子として生活する中で、自然と茶の仕事を選択している。生活の場と仕事の場が近い環境で成長することによる親しみは、家業継承の選択に作用しているのである。

また、手伝いをさせることは、自分の仕事に向き合う姿を子どもに見てもらうことにもなる。東京電力福島第一原発事故の風評被害は狭山茶産地にも大きな打撃を与えたが、I家の事例を見ると、息子である I.B は「父親が放射能の風評被害の中でも畑を守り続けている姿を見たこと」を、継いだ理由として挙げている。苦境の中においても畑を守り続ける親の姿勢は、子どもに「畑を受け継いでいきたい」という思いに向かわせる要素になったことが分かる。だからこそ、親である I.A は息子が家業を継ぐことを選択したことに対し、「これまでの道のりが報われた」と喜びの気持ちを抱いたのであろう。

親による強制の意図が強く出ている事例もある。B.Aには子どもは娘がいなかったが、その娘である B.Cには高校後の進路を決める際に「農業につ



いて勉強出来る大学に行かないのであれば進学する必要はない」と言っていたという。結果的にB.Cは農業大学に進学し、大学で現在のB家の後継者であるB.Bと出会い結婚している。B.Cが進路選択するにあたって「せっかく大学まで進学するのであれば、農業に繋がる勉強をして家業に役立ててほしい」という親の意図が作用していることが分かる。

親が子どもに家業を継いでもらうために最も苦心することは経営状況の安定化である。親世代が茶業界の好況期に家業を継ぐことを選択したように、経済的に安定し、生活に不安がない状態というのは次世代に家業を繋いでいくうえで重要な要素である。現在、子世代は茶需要の低下という不況の中で、次世代にどう家業を繋いでいけるようにするかを悩んでいる。A.B、B.Bのように「子どもに継いでもらいたいと思うのならば、生活に苦勞しないようにより良い経営状態にしなければならない」と考え、またこの先、茶業界の状況がどうなるか分からないという不安から強制的に継がせることは出来ないという言葉は、今回聞き取りを行った話者のほぼ全員が語っている。家業は家族を中心に営まれるからこそ、そこにはなるべく子どもには苦勞をかけたくないという親心があるのである。

親は子に家業を継いでもらうため、手伝いをさせたり仕事の空間を見せたりするなどの工夫をしている。そうすることで家業の内容を理解してもらうことに加え、自らやりがいや魅力を見出してもらおうとしているのである。強制的な態度をとる事例もあるものの、多くの場合頭ごなしの強制ではなく、自ら継承することを選択してもらえようようにしたいと考えている。加えて、経営状態を安定させることは、生活の安定だけではなく、次世代に安心して家業を継いでもらううえで重要な要素であると捉えている。子に少しでも苦勞や負担を掛けさせたくないという親心が表れている。

### 3 製茶農家の特性

本節では、主に町田の先行研究と照らし合わせながら家業が継承される構造をまとめる。次に狭山茶産地における製茶農家の特性として、消費者との密接さに注目した分析を行う。

## (1) 家業の継承構造

町田の研究にもあるように、家族労働としての家業の特性には、継承することで衣・食・住の心配がなくなること、家族内で最低限の福利厚生が実現することがあり、加えて自分の生き方や仕事のやり方を自分自身で選択できることが家業のやりがいとなる [町田 2017: 144-145]。前節で確認したように、本調査での話者の選択の根底にも、このような家業の特性を見ることが出来る。

また、技術や知識といった家産の継承にも注目する。家業を継ぐことは、日々の仕事を家族と共にしていくことである。茶の専門機関で茶業の基礎知識を学んだ後継者たちも、その後は父親と共同で仕事をすることで家の技術や知識を継承している。父親の持つ知識は後継者にとって大きな指針でもあり、仕事に慣れて自分のやり方を徐々に模索し始める時期になっても、天候不良や加工段階での不測の事態においては父親を頼る。「学校で基本的な知識は学んでも、なんだかんだ父の知識には敵わない」(E.B) というように、家業においては父から受け継ぐ技術や知識に対する信頼は大きいのである。加えて茶業の特性として、茶樹を複数世代で育てる農業であるという点が挙げられる。後継者は永年生作物である茶樹を受け継ぐことで、家産としての茶畑と家の技術を継承している [町田 2019: 16-17]。I.B は東京電力福島第一原発事故での風評被害の中でなお、父親が茶畑を守り続けたことから家業を継ぐことを選択したが、これは茶畑を家産として認識し、茶樹を受け継いでいかなければという意識が生まれたということであるだろう。

## (2) 消費者の存在

家族内に注目した家業継承構造の分析はすでに岩元や町田が行っている通りであり、実際に本研究でも同様の事例が見られた。また、どの業種でもそうであるが、経営する上で最も重要なことは不便なく生活できるだけの稼ぎを得ることであり、それが継承意識にも影響することは先述の通りである。しかし、小売り機能を持つ製茶農家における家業継承の分析においては、更に消費者の存在にも注目していきたい。

町田が対象とした静岡県磐田市の茶生産では、共同工場がないため農家ごとに茶園や工場を所有してはいるものの、流通においては才取りを通じて茶商との関係が築かれているなど、栽培から販売までの全ての工程が自家で完結する経営形態は主流ではない。対して、狭山茶産地では自園自製自販型経営の製茶農家が多いことが特徴とされる。今回調査を行った農家のほとんどは茶園と工場だけでなく店舗を所有しており、店舗がないF家も消費者との直接の交流の機会を持っているのである。ここでは、他の茶産地とは異なる点として、農家と消費者の関わりに焦点を当てる。

多くの家では接客を女性だけではなく茶の生産を中心に行う男性も一緒に担っている。それは、消費者とのコミュニケーションを通して、どのような商品が望まれているのか、自分が作った茶がどのような評価を受けているのかを知ろうとする農家の姿勢によるものである。また、「おいしい」という消費者からの評価は大きな喜びとなり、やりがいになるという (E.B)。製茶農家は茶作りだけでなく消費者との交流も重視しているのである。また、消費者との交流は茶業界が低迷している中ではニーズを確認し、それに合わせた商品開発に動くためのきっかけにもなっている。実際、農家によっては煎茶以外にほうじ茶や紅茶、茶を使用した菓子等を作っており、消費者のニーズに応じた多様な商品開発が行われている。

D.Bは幼少期、家を「人の出入りが多い」と感じていたという。それは仕事における雇用によるものだけではなく、店があることでの消費者の出入りが多かったことも指しており、小売り機能を持つ農家に生まれた子供の正直な実感が表れている。

加えて市内の茶畑は一面に広がる広大なものではない。小規模な茶畑が点在し、道路とも隣接しているため、茶畑の景色に慣れ親しんだ近隣住民には管理状態やその年の茶の状態が分かってしまうという。店舗だけでなく、茶園の整備においても消費者や近隣住民の目を意識しているのである (E.B)。このように、狭山茶産地における製茶農家は消費者との距離が近く、茶作りにおいてその存在を強く意識しているといえよう。

#### 4 製茶農家にみる家業継承構造

本節では、これまでの事例分析を踏まえて、入間市の製茶農家においてなぜ家業が継承されてきたのかを考察していく。

製茶農家では栽培・加工・販売を全て自家で行うことが出来る。つまり、これまで培ってきた技術や知識を茶作りに反映させ、その成果である商品を消費者に直接評価してもらえらる環境があるのである。また、消費者との交流の中でどのような商品や販売スタイルが望まれているかを知ることにより、新たな商品開発や経営選択が行われる。そこには、職人としての面白さと商売の面白さがあり、農家は仕事に対して大きなやりがいを持つことが出来るのである。そして、このような製茶農家の特性の根幹には、生葉の加工方法によって多様な商品を作り出せるという加工品としての茶の特性と、人々の生活様式の変化の影響を受けやすい嗜好品としての茶の特性があるのである。D.BやE.Bは「通販ではなく顔の見える商売をしたい」と述べているが、それは直接消費者と交流することでどのような人が自分の作ったお茶を求めているのかを知りたい、さらに自身の作ったお茶のこだわりや美味しい飲み方を伝えたいという思いがあるからである。

また、消費者や茶商との関係は、茶作りにおけるやりがいだけではなく、これまで家が培ってきた信用を守り、おいしい・望まれるお茶を作ることへの責任も農家に自覚させる。農家はやりがいと責任を以て仕事をする中で家業への愛着を持ち、自分の子供に家業を繋いでいきたいと思うようになるのである。

家業が継承される事由には、親による経営安定のための努力や、手伝いをさせることで家業への理解を深めさせようとする意図がある。それを受けて子は長男である意識などもありながらも、自らが納得できる理由を見つけながら後継者となる選択を行っている。加えて、そもそも製茶農家において親が次世代への継承意欲を持つ背景には、茶作りにおける職人としての面白さと、小売り機能による消費者との交流によって生まれる商売の面白さがある。そこにやりがいや責任が生まれることで家業への愛着が芽生え、次世代にも繋いでいきたいと考えるようになるのである。

## おわりに

以上、狭山茶産地の中心である入間市の事例を通して、製茶農家の経営と、家業としての継承の事由を分析してきた。長男が家を継ぐという家父長的な規範は、依然として家業継承の選択において影響を持っているが、子が就農を選択する理由はそれだけでは説明できない。仕事のやりがいを見出したり、親の仕事に対する姿勢から家業を途絶えさせたくないと考えたり、家業を継ぐことで得られるメリットを考慮したりして、仕事の大変さを理解しながらも自分なりに納得する点を見つけて家業に従事しているのである。また親は子どもに手伝いをさせたり、経営状況の改善を目指したりして、子どもが家業継承という選択に向かうように工夫しているのである。加えて、狭山茶産地の特徴である小売り機能を持つ製茶農家という点に注目すれば、消費者との交流は農家のやりがいや喜び、責任感にも繋がり、さらに茶作りへの意欲へと繋がる。そこには、茶作りと商いの面白さがある。家業としての茶業の継続を意識させているのである。

近年は A.B をはじめとする若手農家による販促イベントの開催や一般向けの講習会などが行われている。自家の農業の継承だけでなく、茶畑を残し、茶の産地として地域を盛り上げていくことを目指して、親世代の頃には見られなかったインターネットや SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）も積極的に活用している。今後、若手農家が家業の継承に向けてどのような行動を起こしているのか、産地内でもどのような傾向が見られるのかを注目していきたい。

また、今回の調査では農家の女性への聞き取りが出来なかった。女性が家業の経営においてどのような機能を果たし、さらに農家の経営の詳細について調査を進めていきたい。

## 注

- 1) そもそも、農業を家業として営む意味とは何か。それについて、岩元泉は家族集団が農業経営にもたらす機能に①家族そのものが経営主体となって一種の組合として成立すること、②家計の貯蔵機能によって気候変動や価格変動といったリスクに柔軟に対応することが可能となること、③生活と労働を共にする家族だからこそ蓄積された技術や知識が継承されること、④家族成員個々人が地域の中で参加しているネットワークが農家と地域を繋ぐ役割を持つこと、⑤家族のより良い生活が経営目標となることを挙げ、家庭内だけではなく、地域社会との関係の維持・形成にも意義があることを指摘した [岩元 2006 : 17-20]。
- 2) 現在の埼玉県川越市とときがわ町において、南北朝時代に「河越茶」、室町時代後期に「慈光茶」が成立したと記録がある。この頃、茶は密教儀礼や禅宗の儀礼で扱われていたため、茶生産は寺院主導で行われていたという [入間市博物館編 2014 : 2-9]。
- 3) 耕作放棄地の問題は他の作物の産地でも同様のことが言える。従来であれば、茶畑が近く付き合いもある農家に手放す畑を代わりに管理してもらったりしていたそうだが、管理可能な茶園面積にも限界がある。そのため、企業の参入は課題もあるものの耕作放棄地削減という面では歓迎されるという。
- 4) 所沢ダイオキシン問題も原発事故の放射能問題も、実際には健康に影響はないという結果になったにもかかわらず買い控えが起こった。これには嗜好品であることに加え、人に贈るという贈答品としての側面が大きく影響したという (C.A)。
- 5) 農家が養豚を行っていた理由として、一つに麦や甘藷といった畑作で出るクズを処理することが可能であったこと、いま一つはたい肥作りが可能であったことがある [入間市史編さん室編 1981 : 35]。
- 6) 一度に 30 kg を攪拌できる粗採機を基本に、連続的に製茶工程が進行するよう他の製茶機械の処理能力・台数を考慮し設計された、製茶機械の構成」のこと [新井 2016 : 218]。
- 7) 茶休みは E.A が中学生の頃であった昭和 40 年代あたりで無くなったという。1 kg 摘むごとに賃金が発生し、その一部を学校に渡していたという。
- 8) 岩元は「いえ」規範の希薄化は親世代に起こっており、それが後継者世代の経営継承を阻害した面があるのではないかと指摘している。そして、鹿児島県屋久島の緑茶栽培をしている農家を例に挙げ、経営継承への強い動機は実際には親世代に依存することなのではないかと考察している [岩元 2003 : 215]。

## 参考文献

新井祥穂

- 2016 「狭山茶産地における現局面の技術構成と生産組織の展開」『人文地理』68号 一般社団法人  
人文地理学会

岩元泉

- 2003 『現代日本農業の継承問題 経営継承と地域農業』日本経済評論社  
2006 「家族農業経営の展開と経営政策」『農業経営研究』43号 日本農業経営学会

入間市史編さん室編

- 1981 『入間市史 民俗・文化財編』入間市  
1991 『入間市史 近代Ⅱ・現代資料編』入間市

入間市博物館編

- 2014 『狭山茶の歴史と現在 “故きを温ねて新しきを知る”』入間市博物館

川手督也

- 2015 「農業経営における家族関係の変容と企業形態」『農業経営研究』53号 日本農業経営学会  
熊谷苑子

- 2006 「現代日本の家族農業経営」『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』40号 淑徳大学総合福祉学  
部

埼玉県茶業協会編

- 1973 『狭山茶業史』埼玉茶業協会

仁平恒夫

- 2011 「農家集団型法人における第三者継承への取り組みと運営変化」『農業経営研究』49号 日  
本農業経営学会

町田歩未

- 2017 「家業という戦略—静岡県磐田市における茶農家を事例に—」『常民文化』40号 成城大学  
常民文化研究会  
2019 「家業として継承される農業—木本作物生産の可能性—」成城大学大学院文学研究科修士  
論文（未公開）

渡部圭一

- 2007 「農家の商才—狭山茶の高度経済成長、その持続と生成—」『史鏡』54号 歴史人類学会  
2008 「高度経済成長期における狭山茶の生産および緑茶消費の変化に関する生活史的研究」『食  
生活化学・文化及び環境に関する研究助成研究紀要』23号 アサヒビール学術振興財団

